
爆裂！ポケモン学園バトル部！！

ガイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爆裂！ポケモン学園バトル部！！

【Zコード】

N5157M

【作者名】

ガイル

【あらすじ】

ポケモン学園に通う少年タイガはひょんなことからポケモンバトル部に入ることになり・・・。

プロローグ（前書き）

ガイルです。

これから頑張って書くので気長に見て下さい。

プロローグ

ポケットモンスター。縮めてポケモン。人々はポケモンと協力し和平に暮らしていた。だが、ポケモンを悪用する人間が増え、ポケモンを道具のように使う現状をおもく見たポケモン協会は正しいポケモンとの共存を子供たちに教えるためポケモン学園を作り子供たちに教育始めた。

これはそのポケモン学園に通っている1人の少年の物語である。

普通に家が並ぶ住宅街、ある一軒の家の中で1人の少年タイガが寝ていた。

「ピカ～、ピカチュ～！」

タイガを1匹のピカチュウが必死起こそうとしていた。

「ピカピ～！ピカチュ～！」

「く～、く～。」

イラッ！

「ピカ～チュー～～！」

ついにキレたピカチュウがタイガに電撃を食らわせた。

バリバリッ、

「～～～、ギャ～～～！」

電撃によつて少年はベッドから転げ落ちた。

「う～、いてて。ライトもひょいと優しく起いしてくわよ。」

ライトと呼ばれたピカチュウは、無視して部屋から出でていった。それを見てタイガは軽くため息をつくと服を着替え、鞄を持ち、下へ降りていった。

「う～、おはよ～。ライト。」

「ピカチュ～！」

タイガは朝食を食べ、皿を洗い、ライトを肩に乗せ、靴を履き、玄関にある「真を持ち上げて、

「父さん、母さん行つてきます。」

「ピカチュ！」

と言つて家をでた。

第一話模擬戦タッグバトル

「お～すタイガ。」

「ズガ～。」

「はよ～、ユウ。」

「ピッカ～！」

「コイツはユウ。一応幼なじみだ。ついでにいつならクラス替え等で離れたことはない、つまり腐れ縁だ。」

「今日は1時間目グランプリでバトルの講習だつてさ。」

「うえ～、俺あの先生嫌いなんだけど。なあ、ライト。」

「ピカ～。」

「ハハ～、しあがねえよ。あの先生お前に思いつきつけてるからな。」

実戦バトル専門のカイリという先生は、なぜだか俺に絡んでくる。というかいつもお手本にとかそういう理由でバトルさせられる。正直うつとおしい。

「まあ、教室行こうぜ。」

「ズガズガ。」

言い忘れていたが、コイツはユウの相棒のズガガイドスのガイ。ずつき等の技を得意にしている。ライトとの仲も、まあ俺とユウの仲ぐらいい付き合いが長い為、よく一緒に遊んでいる。

「そうだな。」

そんなこんなで、1時限目に入った。

「今日はタッグバトルの授業ですが、始めにクラス代表で見本を見せていただきます。タイガ君、ユウ君頼めますか？」

うわ～、やっぱりきたよ。

「・・・・・はい。」

「わかりました。」

さて、相手は誰かな？

「先生～、僕らがバトルしましょ～うか？」
と出て来たのは・・・・誰だ？

「せひ、ヒロトとセイヤだ。金持ちの。つたべクラスの奴ぐらい覚えろよ。」

「悪い悪い。」

そんな事をコウと話していると、

「じゃあお願いするわ。両方ともバトルゾーンへ。」

それぞれバトルゾーンに立つと、

「各個人1匹ずつ、どちらか両方のポケモンが倒れたら試合終了よ。では、始めーー！」

「頼むぜライター！」

「行つてくれガイ！」

「行け！ロズレイドー！」

「頼みますーゴーリギーー！」

ちなみにポケモンに名前をつけるかつけないかは自由で特に決まってはいない。

「さあ、ロズレイドマジカルリーフー！」

「でんじはで撃ち落とせーー！」

向かつてきた「マジカルリーフ」がでんじはによつて下に落ちた。

「ゴーリキー！ ばくれつパンチ！」

「足元でんじは！」

「ゴーリキーはばくれつパンチを放つ前に転んだ。

「しねんのずつき！」

「ゴーリキーにガイがしねんのずつきを当つてた。

「ゴーリキー！？」

「ちつちつ！ ロズレイド、リーフストーム！」

「ガイとライト」にリーフストームが向かつてきた。

「かえんほつしゃ！」

「十万ボルト！」

リーフストームにかえんほつしゃと十万ボルトがぶつかり。

「ドカーン！ ！」

煙りがはれると、

「ロゼー。」

「ツキ～。」

「ピッカ～。」

「ズガ～！」

目を回したロズレイドとゴーリキーと、元気いっぱいのライトとガイがいた。

「ゴーリキー、ロズレイド戦闘不能～よつてタイガ・ユウ組の勝ち～！」

第一話模擬戦タッグバトル（後書き）

次回はさっそく新キャラを出します！

第一話出合い

（放課後）

ユウは部活に俺は部活には入っていないので帰ろうとしていた。

「んじゃ、また明日。」

「おう、またなユウ。」

「ズガズガ。」

「ピカ～ピカチュ。」

扉に手をかけて開けようとした時、

ガラッ！

「ユウ君！大変なの、ちょっと来て！～」

と短髪のいかにも運動をやつてそうな女の子が飛び込んで来た。

「わかった、じゃあなタイガ。」

「おう。」

ユウと女の子がいなくなり、ガランとした教室を出て、ライトを肩に乗せ、俺はいつものようにいたん家に帰り荷物を置いて晩飯の買い物に出でていた。

「あ～、今日ピーチのサイト？」

「ピ～カ～？・・・ピッカチュ～！」

「お～、オムライスか。よし、今日はオムライスだ。」

「ピカー！」

とそんな会話をしながら買い物をすませ。家に向かっていると、「やめて下さいー！離してーー！」

「いいじやねえかお嬢ちゃん、ちょっとぐらい付き合ひてくれよ。」

「やつやつ、ちょっとでいいから。」

いかにも不良つて感じの2人組が嫌がつている女の子をナンパしていた。

「ちょっとぐらいいいだから、イテツ！？なんだ？」

「ピカー！？」

1匹のピカチュウがほつぺから電気をバリバリと出しながら男達を威嚇していた。

「なつ、なんだコイツ！？」

「ライリー！？」

「コイツ！？ いけ、ガラガラ！ ほねこんぼつー。」

ドカッ！

ライリと呼ばれたピカチュウが吹っ飛んだ。

「ライリ！！」

「ああ、来てもらおうかー。」

「やめて下さいー。」

男達が女の子を無理矢理連れていくつとつかんだ。

「ライト、助けに行くぞー。」

「ピカチュー！」

俺は荷物を置いて、女の子を助けるため男達の方へ向かった。

「離してー。」

「いいからさつさと来い！」

「おい！嫌がつてんだろ離せよー。」

「なんだてめえ。」

「いいから離せって言つてんだよ。」

「この野郎！ガラガラ、このガキにほねこんぼうだー。」

ガラガラが俺の方に向かってくる。

「危ない！」

女の子が叫ぶ。そして

ガキン！

「なつー！？」

「えつー！？」

俺の前でライトがほねこんぼうをアイアンテールで受け止めていた。

「サンキュー、ライト。」

「ピカチュウ！」

「なつ、おい！お前も手伝え！」

「ああ、ドグロック！」

さつきまで後ろにいた奴までポケモンを出してきた。俺は、

「ちょっと下がってくれ。」

「あっ、はい。」

女の子を後ろにかばい腰に付けたボールに手を伸ばした。

「頼むぜ！」「シラコキ！」

俺が出したのは、『シラコキ』『ラプラス』だ。

「ピッカ！ピカチュ！」

「ラス～！」

久しぶりのダブルバトルで気合いはいつてるな。

「ガラガラ！ほねこんぼう！」

「ドグロック！ぞくづき！」

それぞれの攻撃が向かってくる。

「ライト・シラコキの上に乗れ！シラコキはふぶき！」

ふぶきが2匹に当たり、ガラガラが吹っ飛んだ。

「ガラガラ！？」

「ちっ、 ドグロック！」

「遅い！ボルテッカー！」

「ピッカー！」

「ドグ～。」

2匹は目を回して倒れていた。

「まだやんの？」

俺がそう問い合わせると、

「ひつ、 行くぞ！」

「あつ、 ああ。」

と逃げていった。

「ふう、 お疲れライト、 シラユキ。」

「ピカチュ～！」

「ラブス～。」

俺がボールにシラユキを戻すと、

「あつ、 あの～。」

「んっ？あっ、君怪我は？」

「だつ、大丈夫です。あつ、ありがとうございました。」

「別にいいから。じゃ、帰り気をつけなよ。」

「はいー。」

そして俺はライトを肩に乗せ、先程置いてきた荷物を持ち家に帰つた。

第一話出で（後書き）

タイガの手持ちですが、
・ライト
・シラユキ
・？？？
となっています。
今のところ3匹しか持つていません。

第二話強制入部！？

2人組の男達にからまれていた女の子を助けた翌日、俺はコウに呼ばれて屋上にいた。

「で、何の用だよ。わざわざここに連れてきて。」

「あ～、用があるのは俺じゃなくて。」

「私達よー。」

見ると屋上の扉の前に2人の女の子が立っていた。しかも1人は、

「あ～、昨日の・・・。」

「は、はいー昨日はありがとうございましたー。」

「なんだよ、タイガ。ミホと知り合いだつたのかよ。」

「ミホ？」

「わ、コイツのこと。姫川美保、知らなかつたのかよ。」

「昨日喋つてる暇無かつたし、すぐ帰つたから。」

「んじや、改めてこつちは武内奈津美。昨日会つたよな。そんでこつちがミホ。2人共俺と同じ部活だ。」

「今度は俺だな。俺は飛龍大牙。^{ヒリュウタイガ}よろしくな。んでコイツが相棒の

「ライドだ。」

「ピッカチュウー。」

「よひしへ」

「よひしへね。」

「とにかくで、ナッシミはタイガに何の用だ？」

「知らなかつのかよ。」

「教えてくれなかつたんだよ。」

「えー、今日タイガ君に来てもらつたのは、ズバリ我がポケモンバトル部に入つてもらつ為よーーー。」

・・・・は？

「はー？」

「ピカ？」

「だーかーら、バトル部に入りなさいーーー。」

「あ、おにナシ!!ちよつと「いふるせい黙つてーーー。」

・・・はー。」

「ウはあつと/or間に撃沈した。

「で、入るの入らないの？」

「あのさバトル部つてポケモン6匹持つてなきや駄目なんだよな。」

一
え
え

一
じ
や
俺
無
理
だ
。
3
四
しか
ボ
ケ
モ
ン
持
つ
て
ね
え
か
ら
。

ヒカル二二

卷之三

גָּתָן־סְתָמָן

ヒナヒ

秀 二 が て 三 が て
父 々 力 看 強 い て 言 て か り て な い

日曜日はモリカケの日曜日

卷之三

「あのう、話しかきはりわからないんですけど、

「ああ、うちの部人数足りないしあんま強くないから廃部になりそ
うなんだよ。」

「ううん、こうなつたらとにかくうちの部に入つて！手持ちはそれからよ！」

「なつ、でも」

「部活入ってないんだから、お願ひ入つて！」

「お願いタイガ君。」

「はあ、しょうがねえな。」

「ピカチュウ。」

こうして俺はポケモンバトル部に入る事になった。

第三話強制入部！？（後書き）

すいません？

主人公達の名前ですが、名字がちゃんとあります。

ちなみにユウ君の名前は不動勇フドウユウです。

では、また次回ぜひご覧下さい。

第四話いきなりバトル！？（前書き）

今回はちょっと短めです。

第四話 いきなりバトル！？

「ソーリーが私達の部室よ。」

と通されたのは、小さめのバトルフィールドがある体育館だった。

「へえ～、ここが結構広いな。」

「まあね。あつ、部長～！部員連れてきましたよ～。」

「おお～早いな、ナツミ～。」

「紹介するわ。この人が我がポケモンバトル部の部長、ヨザクラソウヤ
夜桜蒼真先輩よ。」

「どうも、俺は飛龍大牙です。コイツは相棒のライト。」

「ピッカチュウ～。」

「おう、よろしくな～。」

「本当はもう一人部員がいるんだけど、まだ来てないみたいね。」

「えつ～もう1人いるのか？じゃあなんで俺が入らなきやならないんだ？5人いれば大会には出られるだろ。」

「ピカピーカ？」

「ミホは部員じゃなくてマネージャーなのよ。」

「はい、あまりバトルは得意じゃないので。」

「へえ～、そうなのか。」

「ピカチュ～。」

とその時、

ダダダダダ～バタン！

「おい、そこのお前なんでミホさんと馴れ馴れしく話してんだ！？」

「・・・・・誰？」

「ピカ？」

「さつき言った最後の1人の風雅湊よ。フウガミナト

「俺はタイガ。今日からバトル部に入ることになったんだ。ようしくな。」

「ピッカピカチュ～！」

「お前が？本当に強いのか？」

「強いよ～、何たつてユウが認めるライバルだからね。」

「それにカツコトイイです。／／／」

「なつ、このやうつて？てめえ、俺と勝負しろー。」

「「はつ？」」

「ピカツ？」

「勝負は2対2ダブルバトル。先に2体倒れた方の負けだ。どうだ！」

「うーん、暇だしいつか。ライトいいか？」

「ピッカ！」

「じゃあ、審判は俺がやうづ。」

「馬鹿だなミナト。」

「アホね。」

「ズガ。」

2人と1匹が呆れたようにその光景を見ていた。

第四話いきなりバトル！？（後書き）

次回タイガの最後の1匹がでます。

第五話ダブルバトル！勝者は！？（前書き）

今日は長いです。

第五話ダブルバトル！勝者は！？

「じゃあ、先輩お願ひします。」

「ああ、ではこれよりダブルバトルを始める。2体共倒れたら試合終了。交換は認めない。いいか？」

「「はい！」」

（観客席）

「さて、ユウジっちが勝つと思つ？」

「まあ、やつてみなきゃわからんが、タイガの方じゃないか？」

「ふうん、私タイガのバトル見るのは初めてだからわからぬいなあ。ミホは？」

「私ですか？うーん正直タイガ君の実力をちゃんと知つてゐるわけじゃないのでわからないです。」

「バトルフィールド」

「では、始め！」

「行くぜ！」エレキ”！”シャドー”！”

ミナトが出したのは”エレキ”《エレブー》と”シャドー”《ゲンガー》だ。

「ふむ。（シラコキはちょっと辛いが、・・・なら・・・。）ライトよろしく。」

「ピッカ！」

タイガの1匹目はライトそして、

「頼むぜ！”ジーク”！”

「バンギラーラー！」

もう1匹は”ジーク”《バンギラス》だ。

「先手必勝！エレキ、バンギラスに十万ボルト！シャドー、ピカチ
ュウにシャドー ボール！」

「エレックブー！」

「ゲーンガー！」

「ジーク！砂嵐で吹き飛ばせ！」

「バーンギィラー！」

砂嵐で2体の攻撃は吹き飛ばされる。

「何つ！？」

「岩なだれ！」

「バッギラ！」

ガラガラッ！

「くつ、かわらわりとシャドーパンチで吹き飛ばせ！」

「エレレレレレッ！」

「ゲーンガガガガガガッ！」

エレキとシャドーは次々と壇を壊していく。

「地震！」

「バンギツ！」

「ヂヂヂヂヂヂヂヂ！」

「なつ！」

「エレ～。」

シャドーは特性浮遊の為効かないが、エレキは倒れてしまつ。

「くつ、シャドー！バンギラスに十万ボル「遅い！ボルテッカー！」

「ピカピカピカピカッピッカ！」

ズガソツ！

シャドーは攻撃を出す前に倒れた。

「エレブー！ゲンガー共に戦闘不能！よつてこの勝負タイガの勝ち！」

「お疲れ～！ありがとな2人共！」

「ピッカ」

「バギバギ」

～観客席～

「ええ～と何がどうなったの？」

「全然わからなかつたです。」

「んじや、最初から説明するべ。」

「お願いします。」

「頼むわ、コウ。」

「まず最初の2体の攻撃を砂嵐で吹き飛ばしたことだけ。」

「そいつ、あれフィールド技でしょどうやつたの？」

「あればバンギラスの特性砂おこしを使つたんだ。」

「はい？」

「バンギラスの砂おこしを一力所に集めそこに新たに砂嵐を使う事で砂嵐の盾を作つたつて訳。」

「じゃあ地震のときピカチュウがダメージを受けなかつたのは？」

「電磁浮遊か、みがわりでも使つたんじやないか。」

「「なるほど。」」

「でも、いくらボルテッカーが電気タイプ最強の技だからって一撃で倒れるのはおかしくない?」

「それはな、きつぎりまでライトに充電させてたんだよ。」

「でも充電してるよ今は見えませんでしたけど。」

「それは多分みがわりだ。タイガは最初砂嵐で攻撃を防ぎ砂嵐で俺達が見えなくなってる時に、電磁浮遊をさせて、次にみがわりをさせそれから充電させたんだ。俺達にばれないようにな。」

「凄っ!...」

「なんにせよ、ミナートの敗因は最初の砂嵐で動搖して指示が遅れた事だと思つぜ。」

「そうですね。」

「それを見抜いたユウも十分凄いよ。」

「うして俺のバトル部初日は幕を閉じた。」

第五話ダブルバトル！勝者は！？（後書き）

ここまで見て頂きありがとうございます。次回も見て頂けたら嬉しいです。

第六話さつそく大会！？（前書き）

更新遅れていますません？

今回は特にバトル等はありませんので、了承下さい。

第六話 もうそく大会!?

バトル部入部7日目。俺はコウとソウマ先輩のバトルを見ていた。

「あ～あ、暇だ～。」

「タイガ君、暇そうですね。」

「よお、ミホ。なんか最近暇で、ライトなんか俺の膝の上で寝てるし。」

「今日、いい天気ですかね。そういうえばタイガ君手持ち大丈夫なんですか?」

「へ?」

「ナツミちゃんが手持ち6匹に増やしここで言ってましたよ。」

「あ～、そういう言つてたな。大会いつだっけ?」

「来週ですけど。」

「はっ!～マジ!～ヤバい、まだ1匹も捕まえてねえ。?」

「い、今から搜せば間に合いますよ。」

「よし、今日からじぱんく休むつて言つていい。」

「えつ!～タイガ君!～」

俺はそう言って部屋から出て行った。

「行つちやつた・・・。」

「あれ? ミホだけか?」

ユウヒソンヒウマがバトルを終えてミホの方に来ていた。

「あの・・・手持ち増やすからしばらく休むってタイガ君が。」

「ああ、でも大丈夫かな?」

「何がだ?」

ソウマが汗を拭きながらきく。

「あいつ他人のポケモンを捕まえるといひは見た事あると思つんですけど、捕まえた事は1回もないんで。」

「はあ? ジヤあライト以外の手持ちは?」

「知り合つて貰つたそ�で。」

「(大丈夫かなあ、タイガ君。)」

～大会当日～

「全員いるか～！」

「タイガ以外はいます。」

ソウマの問いにナツミが元気よく答える。

「あいつ何やってんだ！？」

「1匹も捕まえられなくて逃げたんじゃないですか。」

ミナトが興味なさそうに言う。その時、

「おお～い！」

とタイガが肩にライトを乗せ、走って来た。

「おせーぞ、タイガ！」

「すいません！？ちょっと手なずけるのに時間がかかるって？」

「まあ、いい。じゃあみんな、行くぞ！」

ソウマを先頭にポケバト部は会場に入つて行つた。

～試合前控室～

それぞれの過ごし方

～タイガとコウの場合～

「なあ、タイガ。」

「ん？ なんだよ？」

「お前いつたい何を捕まえたんだ？」

「へえ～、コウ気になんのか？」

笑いながらタイガがきいた。

「まあな、お前との付き合いで長いから捕まえたと言つ事が信じられねえ。」

「やうだううな。じゃ、コウことは教えるぜー。実は・・・・・。」

タイガとコウの場合、お互いのコンディションを確認する。

～ミホとナシミの場合～

「うひ、緊張してたよ～。？」

ミホは強張つた顔でナツミを見た。

「あんたは出ないでしょ！」

「でもね～～。」

「ほおー、そんな強張つた顔タイガに見られていいのかなあ？」

—ヤ—ヤ笑いながらナツミは赤を見た。

真っ赤な顔でミホはナッシミを睨む。

冗談だよ！怒らない怒らない。

三赤とナツ三の場合、ナツ三が三赤をからかう。

～ミナトの場合～

「（絶対勝つてミホさんに・・・・・フハハハハハ！）」

ミナトの場合、1人で妄想中

～ソウマの場合～

「ぐ～、ぐ～。」

ソウマの場合、睡眠中。

そしていよいよ大会の幕が切って落とされる。

第六話さつそく大会！？（後書き）

次回は大会の開会式です。

説明その1

この小説を見て頂きありがとうございます。

この『爆裂！ポケモン学園バトル部！』を執筆している途中、いくつか設定を説明せずとばして書いてしまった部分がありました。誠に申し訳ありません。

そこでたまに説明する為の話を挟んで執筆することにしました。お手数をおかけするようで申し訳ないのですが、見て頂けたらさいわいです。

- ・この世界はゲームの中の地理のまんますがジムという建物は無く、各地に小中高一貫の学園があります。（ちなみにタイガの学園はトキワシティで大会はセキエイ高原でやっています）
- ・旅は学園を卒業してなおかつ資格を取った人だけが出ることを許されます。
- ・ポケモンリーグはちゃんとあります、参加する為には条件がありどれかをクリアしなければなりません。

1. リーグの開始一ヶ月前に行われる予選に出る。（これは最終的に14人しかリーグに出られません）

2・伝説ポケモンをゲットする

3・四天王またはチャンピオンに公式に行われる大会で勝つ。

の3つです。（じくまれに例外が起きる場合もあります。例：なんらかの形で警察に貢献した等）

今回はこれで終わりたいと思います。

こんないたらない私ですがこれからも見て頂けたらさいわいです。

説明その1（後書き）

次からは本編を更新します。
もう少しまつて下さい。
まっていてくれた皆さんすいません？

第七話開会式（前書き）

久しぶりに更新しました。
今回は蒼真視点でお送りします。

第七話開会式

「では、これよりポケモンバトル大会地区予選開会式を始めます。」

長い挨拶が終わりやつと解放された俺こと、夜桜蒼真は後輩達を引き連れ控室に向かっていた。

「先輩～、試合何時からですか？」

今のは後輩の武内奈津美だ。こう見えてなかなか腹黒い戦いを得意としていてはつきり言うと俺は戦いたくない。そういや、試合いつだつだけ？

「あ～、忘れた～」

「あの、確か私達の所はEブロックだから2時間後ぐらいです。」

今のは姫川美保。なんでこの部活に入ったんだ？と聞きたくなるくらい、いい子だ。マネージャーという面倒な仕事をやってくれている。

「先輩～、試合時間ぐらい確認して下さ～よ～」

「すまん武内」

控室に入り、俺は全員を集めた。

「う～、んじゃ今回の大会について話すから全員よく聞けよ～」

「「はい！」

「今回の大会は3年がいりや引退試合だつたが、うちにやいないから関係ない。予選はA～Nブロックに別れてる。ただし去年の優勝校と準優勝校はシードになつてゐるから関係ない。ここまではいいか？」

「はい！」

「大丈夫で～す」

「んじや続けるぞ。予選は各チームの中から2人を選出して2回戦行うんだがルールが毎年変わるので直前まで選手には教えない事になつてゐる。」

「うわあ、面倒臭いわね～」

「俺もそう思う。そこで相手に情報を与えない為の作戦として、俺、
飛竜大牙、ヒリュウタイガ風雅湊は休み。出るのは不動勇、フドウヨウ武内奈津美だ。」

「う～す」

「ア解で～す！」

「んじや解散～」

俺は「うつと長椅子にねつこらがつてゐると、

「あの、ソウマ先輩。」

「ん？ なんだ、姫川？」

「なんで、タイガ君やミナート君を予選から外したんですか？」

「ああ、それは最近出番少ないってあいつらが作者をボコボコに・・・、つとまあそれは置いといて。あいつらはああゆづ変則的な戦いが得意なんだよ。まあ、見てりや分かるや。」

「わかりました。」

そしていよいよ予選が始まる・・・。

第七話開会式（後書き）

はい、とこりわけで第七話をお送りしました～

『タイガ』「ところでのソウマ先輩が言いかけた台詞って・・・」

「言わなこでえーーー！思い出しちゃうよーー！」

『ナッシ』「まあ、知らない方がいい事もあるって事よ。」

『タイガ』「・・・？」

『ハウ』「まあまあ、では次回は俺とナッシが活躍するんでよろしくお願いします。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5157m/>

爆裂！ポケモン学園バトル部！！

2010年10月14日13時01分発行